平和な社会の実現に向け
世界の次世代リーダーと考える

対話が拓く未来

SPF 笠川平和財団
Think, Do, and Innovate -Tank

世界中で戦争や紛争が止まないのは、当事者間の相互理解に向けた対話や交流の不足が要因の一つではないだろうか。社会の平和と安定を図るため、各国の次世代リーダー同士の対話を進める笠川平和財団の動きを6回シリーズで追う。

今回の対話

日本人学生訪イラン研修

日本とイランは長年友好な関係を築いてきたが、米国のイランへの経済政策の影響を受け、その関係は希薄になってきている。笠川平和財団は将来の日イラン関係の維持・強化に向け、イラン外務省付属の国際関係学院（School of International Relations, SIR）と連携し、双方の学生が互いの国を訪れ、交流する研修を2009年から実施。日本人学生によるイラン研修には計7回で延べ53名が参加した。

2025年度（2026年2月実施予定）の募集要項は追ってこちらに掲載。

第1回　日本とイランのこれからを柔軟な視点で捉える

イランのリアルな姿を自らの眼で確かめ、肌で感じるイラン研修で、
日本人学生たちは何を学んだのか。二人の参加者に聞いた。

違いを「障壁」とみなさない

2024年度参加　土屋 京香さん　東京外国語大学 国際社会学部４年

世界の子どもをつなぐ場をつくりたい

教育学を専攻する私は、世界中の子どもたちがつながり、学び合える機会やプラットフォームづくりをしていきたいと考えている。国際交流プログラムを提供する会社でインターンをし、日本と海外の学生同士が学び合い、刺激を与え合う姿から、世界各国の子どもたちを「つなぐ」ことで生まれるインパクトを目の当たりにした。日本とアフガニスタンの女子高生との交流では、日本の学生が持っていた中東に対する偏ったイメージが変わっていく姿を垣間見た。

そんな時、このイラン研修を知った。次はイランと日本の子どもたちをつなぎたい。そのために、まず私自身が実際にイランを見て、人々の考え方や生き方に触れ、日本の学生に届ける方法を模索したい。そんな思いで研修に参加した。

イランの学生と食事をしながら意見交換
（左手前2人目が土屋さん）

「個」に目を向ける大切さを再認識

研修でのイランの学生たちとの交流は、「絡まっているものを共に解いていく」という感覚だった。彼らの視点で見た「平和と安定」、家族や宗教に対する考え方など、研修の間、一緒に食事をし、街を歩きながら話すことで徐々に理解が深まり、お互いにさまざまなことを自己開示していく中で、信頼関係が構築された。異なる視点を持つ者が交流する時、そこでは必ず「違い」を知覚する。これをお互いが理解し合う上での「障壁」と捉えないことが大事だとわかった。

そして最も大きな気づきは、「個」に目を向けることの大切さだった。メディアは基本的に、「国」単位の情報を伝える。しかし、実際にイランを訪れ、さまざまな人とコミュニケーションをとることで、イランの人たちの考え方や思いは多様であり、濃淡があることに気づいた。同時に、イランの人たちが共通して持つ「温かさ」と「強さ」に触れることもできた。街角で声をかけてきた女の子たちが、自分の将来や夢について語るその生き生きとした表情を忘れることができない。

古都エスファハーンで出会った女の子と交流をする土屋さん（右）

研修後、イランと日本の中高生を対象にしたオンライン交流に向けて準備を進めていた時、イラン・イスラエル間の12日間戦争が起きた。いまだ先行きは見えないが、イランが国際的に孤立しかねない状況である今だからこそ、日本とイランの学生交流を行う意義があると考える。

日本では西洋的視点から偏った報道をされることが多いイランだが、実際にイランの人々と話し、考え方や暮らしを知ることで、平和について考え直す機会となった。今後も日本とイランとの交流の可能性を探っていきたい。

人と人の関係が外交を築く

2023年度参加　岩倉 如月さん　外務省 軍縮不拡散・科学部 軍備管理軍縮課

イランの生の姿を知りたい

「ペルシャ」という言葉の響きと、その言葉を話すイランという国に対するイメージとのギャップに興味を持ち、大学でペルシャ語を学んだ。大学２年生の時にイランへ留学したが、ヘジャーブ（頭部を覆う布）の着用問題を巡ってイラン国内の情勢が悪化し、３カ月半で帰国せざるを得なくなった。その際、不安になっていた私を救ってくれたのは日本の外務省からの安全メールだった。学んだペルシャ語を使って、イランと日本の関係を良くする仕事がしたいという思いから、外務省専門職員になろうと決めた。

このイラン研修に応募したのは、外交官を目指し試験勉強をしていた真っ最中だった。現地プログラムのイランの外交官を目指す学生との交流に参加してみたかったし、以前の留学で垣間見たイランの生の姿をもっと見てみたいと強く感じていた。

本質的な事実に迫る目を持つ

実際に、イランの学生たちと議論していると、イラン政府が出している見解と国民の気持ちが必ずしも一致しないことがわかった。また、イラン人全員がアメリカを嫌っていると思われがちだが、国の立場と文化を切り分け、国民レベルではアメリカ文化に好意的な見方をしている人もいた。これは日本でイランに関する報道を見ているだけではわからない視点だった。

研修で訪れたテヘラン平和博物館の担当者に、「戦争をなくし平和を追求するために、外交に何を期待するか」と尋ねると、「個人ができる平和活動を行い、『全ての人間は皆同じ人類であることを忘れない』という姿勢が重要だ」と言われた。そして、「あなたはどう思うか」と聞かれ、答えに窮してしまった。まだ、明確な答えは見つからないが、その答えを模索し続け、国際社会での貢献を目指したい。

共に過ごしたイランの学生と（右前3人目が岩倉さん）

研修後、日本を訪問したイラン人学生たちのサポートをする機会を得た。初めて日本に来たイラン人学生たちが日本を好きになる様子は、イランでイラン人学生が私たち日本人を温かくもてなしてくれたことで、私がイランを好きになったのと同じだ。結局、人と人との関係が積み重なって国同士の関係が構築されていくと感じた。

外交官として日本とイランの関係を紡ぐ仕事をしていく中で、バイアスがかかった情報や報道などに感わされることなく、自分の眼を通して本質的な事実に迫ることを大切にしていきたい。

From　イラン

日本とイランの相互理解に向けた架け橋に
元駐日イラン大使が回顧録を刊行

日本とイラン、双方の学生研修は、2008年から４年間、駐日イラン大使を務めたセイエド・アッバス・アラグチ氏（現イラン外務大臣）と笠川平和財団との間で、日イランの関係強化に向けた思いが一致したことで始まった。笠川平和財団は、アラグチ氏が日本で過ごした経験をもとに日本人や日本社会への理解を自身の視点からつづった書籍の日本語版『イランと日本』を昨年、刊行した。外交官としての鋭い観察眼と、日本への深い敬意が伝わってくると同時に、両国の架け橋となる貴重な証言となっている。

イラン学生訪日研修（2024年度）に参加したアミール・サマディさんより

研修で得た最も深い気づきの一つは、外交において「人と人との直接的な関わり」がいかに重要かという点だ。正式な交渉や政府間の協議は欠かせないが、最終的に真の信頼と相互理解を育むのは、直接的な対話や交流による個人的なつながりだと実感した。この気づきは、私の国際関係への姿勢に大きな影響を与え、文化外交や草の根の交流をより重視するようになった。人と人との関係性への投資こそが、永続的な平和、相互尊重、そして持続可能なパートナーシップの基盤になると確信している。